

生徒指導・教育相談における児童生徒を支援する力を高める研究（第二年次）

－児童生徒理解の深化と活用－

教育相談チーム

〈研究の要旨〉

いじめ・不登校などの解決のためには、より確かな児童生徒理解に裏付けられた教員の児童生徒を支援する力を高めることが不可欠である。第一年次の研究を通して、児童生徒理解に焦点を当てた校内研修と日常指導の充実により、教員の児童生徒を支援する力の向上と、児童生徒の学校生活への意欲や安心感の向上が見られた。第二年次は、児童生徒理解を更に深め、それらを児童生徒の指導・支援に活用するという視点での校内研修を充実させることにより、更なる児童生徒を支援する力の向上を目指した。

I 研究の趣旨

文部科学省の平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、全国の小・中学校及び高等学校の半数以上でいじめが認知されている。また、校種によって多少の差異はあるものの、「不登校児童生徒数」も依然として減少していない。本県においても、小・中学校及び高等学校の「いじめ認知件数」は2,046件、小・中学校の「不登校児童生徒数」は、1,000人当たり12.7人で、1,862人の児童生徒が不登校となっている。また、五年前から当教育センターの教育相談チーム（以下、当チーム）に「いじめの未然防止と人間関係づくり」や「学級集団理解の進め方」をテーマとした出前講座の依頼が数多く寄せられていることから、学校で起きている生徒指導上の諸問題の予防や対応が喫緊の課題となっているととらえられる。

児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題は、学校生活や家庭生活等における不安や悩み、不満などの、欲求がかなえられない現状に対する児童生徒の葛藤がその要因となっているとも考えられる。そのため、教員には、児童生徒のもつ不安や悩み、不満などを適切に理解し、そのニーズに合わせた支援を行うことが求められている。「生徒指導提要」においても、「教員は、すべての児童生徒には問題行動の要因が潜在している可能性があるということを常に念頭に置き、児童生徒の発するサインを見逃さないよう、〔中略〕児童生徒理解を着実に進め、問題行動の早期発見に努める」（文部科学省、2010）ことが求められており、確かな児童生徒理解に裏付けられた生徒指導を行うことは教員の責務ともなっている。

第一年次の研究では、教員の児童生徒を支援する力を高めることにより、児童生徒の心理的な不安等を軽減し、学校が安心できる居場所であると感じさせることができるよう、児童生徒理解に焦点を当てた校内研修と日常指

導^{*1}の充実を図るための実践を積み重ねてきた。その結果、研究協力校^{*2}（以下、協力校）の教員は、より確かな児童生徒理解の重要性を再認識するとともに、深めた理解をその後の指導・支援に活用しようとする思いを高めることができた。また、教員自身の日常指導の在り方を振り返ることで、自身の日常指導の充実に向けて意識の高揚を図ることができた。一方、児童生徒理解の深め方、また、児童生徒のニーズに応じた具体的な指導・支援の在り方については十分な研修を行うことができず、課題が残った。

そこで、第二年次の研究においては、特に多角的・多面的な視点での児童生徒理解の深化を図り、その理解をどのように児童生徒の指導・支援に活用していくのかに視点を当てた校内研修と、日常指導の充実を図ることを通して、生徒指導・教育相談における教員の「児童生徒を支援する力」を更に高めることを目指した。

※1 児童生徒の学校生活を充実したものとすために行う、学校生活全般における日常的な指導

※2 昨年度の研究協力校であるA市B小学校・A市C中学校の二校（「福島県教育センター研究紀要 第46集」参照）。

II 研究の概要

1 研究仮説

児童生徒理解の深化や活用に焦点を当てた校内研修と日常指導の充実を図れば、教員及び教員組織の「児童生徒を支援する力」を向上させることができるであろう。

2 児童生徒を支援する力について

本研究における「児童生徒を支援する力」は、平成24年度に当チームが規定した以下の六つの力とした（「福島県教育センター研究紀要 第41集」参照）。

〈教員が個人として身に付けたい力〉

A 1 児童生徒を個人・集団として理解する力

A 2 コミュニケーション力

A 3 児童生徒間に人間関係づくりを促進する力

- A 4 指導困難事例への対応力
(組織として高めたい力)
- B 1 同僚と助け合い協力して活動する力
- B 2 同僚間で承認感を高め合う力

教員が個人として身に付けたい力（A 1～A 4）は、日々の児童生徒との関わりの中で身に付けるものであり、確かな児童生徒理解とその積み重ねによって高められるものである。また、組織として高めたい力（B 1・B 2）は、それぞれの教員の個人として身に付けたい力（A 1～A 4）の高まりと、教員同士のつながりによって高められるものである（「福島県教育センター研究紀要 第43集」参照）。そのため、本研究における校内研修では、特に個人として身に付けたい力（A 1～A 4）の向上を目指す内容を取り上げることとした。

3 児童生徒理解について

前述のように、教員の児童生徒を支援する力の向上は、確かな児童生徒理解の積み重ねにより、児童生徒を指導・支援していくことと密接に関わっている。

そこで当チームでは、児童生徒理解を「見る（知る）」「読み解く（深める）」「生かす（支援する）」の三段階からなる一連の流れととらえ、各段階を次のように位置付けた。

- 「見る（知る）」段階；学習場面や生活場面、遊びの場面など学校生活における様々な機会を通して児童生徒に向き合う際に、児童生徒の姿や行動をありのままに見取る段階
- 「読み解く（深める）」段階；児童生徒の姿や行動の背景を様々な視点から探り、理解を深めていく段階
- 「生かす（支援する）」段階；深めた理解を基に、児童生徒が生きる力を伸ばしたり、自立したりできるようにするための指導・支援を行う段階

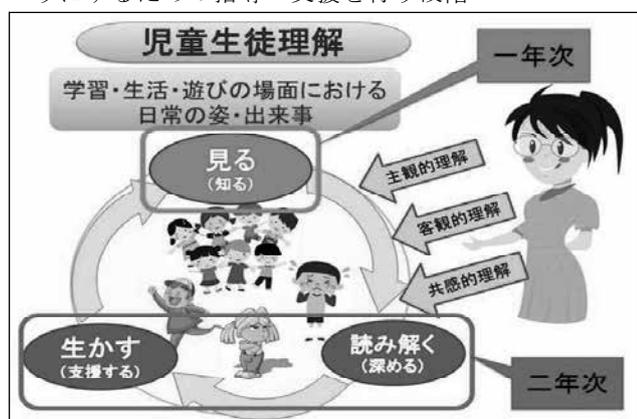


図1 児童生徒理解について

加えて、児童生徒理解をより確かなものとするために、友人関係や家庭環境、学習面など児童生徒の様々な側面

から多面的に、また「主観」「客観」「共感」の各視点から多角的に理解することを重視した（図1）。

4 研究の構想

第一年次は、児童生徒理解をベースに4回の校内研修を実施した。特に「見る（知る）」段階の充実を目指した校内研修を積み重ね、児童生徒理解の促進を目指してきた。また、年に4回の校内研修だけではねらいに迫ることは難しいと考え、日常指導の充実を図る取組も並行して行った。その際、Q-U^{※3}のデータが満足型の学級（以下、満足型学級^{※4}）である教員に対して、日常指導や学級経営のこつや工夫などについて聞き取りを行い、それらを基に日常指導を充実させる資料の整備を図った。実践を積み重ねることにより、児童生徒を支援するためには、適切に児童生徒を理解しなければならないことや児童生徒理解の方法やその視点について確認することができた。また、日常指導の充実のために作成した「日常指導ふりかえりシート」を実施したことにより、自身の日常指導の充実に向けて意識の高揚を図ることができた。

第二年次は、第一年次に高められた児童生徒を支援する力をより高めるために、児童生徒理解を更に深め、指導・支援に生かすという視点で校内研修を実施した。その際、前述の児童生徒理解の「読み解く」場面を「深化」とし、担任の主観的理解のみならず、様々な教職員の視点や質問紙等からとらえられる情報を基にした客観的理解、また、児童生徒の心情に寄り添った共感的理解などを組み合わせながら、多角的・多面的に理解を深めていく方法を提案した。また、「生かす」場面を「活用」とし、児童生徒の実態に対して具体的にどのような指導・支援が効果的なのかについて、事例を基に理解を深めたり、協議したりする校内研修を実施することで、児童生徒を支援する力の向上を図った（図2）。

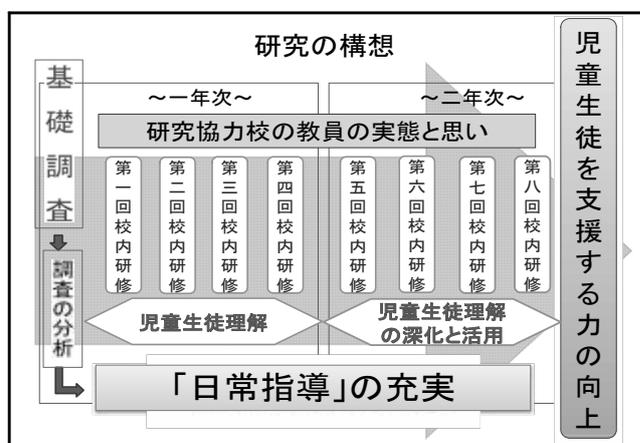


図2 研究の構想

※3 学級集団の状態や児童生徒個人の満足感と意欲を把握するアンケート

※4 Q-Uの学級満足度尺度において、学級生活満足群に70%以上の児童生徒が位置している学級

III 研究の実際

1 研究協力校について

(1) 研究協力校

- ・A市立B小学校（教職員数14名，児童数59名）
- ・A市立C中学校（教職員数11名，生徒数44名）

両校は、校庭や体育館を共用しながら、同じ校舎で小・中学生が共に生活をしている学校である。もともと交流が図られやすい環境にあるが、第一年次の研究実践で合同研修を重ねたことにより、教員間の交流が更に進んだ。また、児童生徒理解に焦点を当てた研修を通して、児童生徒理解の重要性や小・中学校9年間を見通した児童生徒支援の意義が共有された。

(2) 校内研修の内容を検討するための事前調査から

校内研修の内容を検討するために、教員に対しては「児童生徒を支援する力」に関するアンケート（「福島県教育センター研究紀要 第41集」参照）を、児童生徒に対してはQ-Uを実施し、協力校の教員や児童生徒の実態を把握した。

① 教員の実態把握とその思い

「児童生徒を支援する力（A1～B2）」に関するアンケートは、評定尺度法による選択式（4件法）で実施した。その際、自由記述欄を設け、生徒指導・教育相談における教員の思いや願い、校内研修に対するニーズなどを把握した。

アンケートの結果からは、協力校の教員の児童生徒を支援する力には、以下の課題があることがうかがえた。

○構成的グループエンカウンター（以下、SGE）^{※5}、ソーシャルスキルトレーニング^{※6}、アサーショントレーニング^{※7}などの手法の理解と活用の仕方

○集団づくりや対人関係の学習の際の、リハーサル（練習）やロールプレイ（役割演技）、活動の振り返りを取り入れた授業の進め方

○問題を抱えた児童生徒への対応を考える際の、よさやできていることに注目した具体的な支援策の策定

※5 ゲームの要素をもった課題と取組の振り返りを含んだグループ体験活動。取組の中で仲間との心のふれあいを体験し、自他理解を深めたり承認感を高めたりすることができる手法

※6 よりよい人間関係を築き、維持していく社会的技能を向上させるトレーニング

※7 自分も相手も大切にしながら、自分の意見や気持ちを表現できるようにするトレーニング

また、教員の思いとして、以下のことが挙げられた。

○客観的なデータなどに裏付けられた個や集団の児童生徒を理解する力の向上

○イライラした児童や発達の特徴や課題を踏まえた児童生徒との関わり方

② 児童生徒の実態把握とその結果

Q-Uの結果から、以下の内容について把握した。

○「学校生活意欲」；「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」（中学生用は、「教師との関係」「進路意識」を加える）

○「学級満足度」；「承認感（友だちや教員から認められていると感じている）」「被侵害感（不適応感、いじめ・冷やかしなどを受けていると感じている）」

○「ソーシャルスキル」；「配慮のスキル（対人関係の基本的なマナーやルールが守られているか）」「かかわりのスキル（人とかかわるきっかけや関係の維持ができていないか）」

Q-Uの結果からは、以下の実態が把握された。

○友達から悪ふざけをされている児童生徒が少ない。

○学級の雰囲気がよいと感じている児童生徒が多い。

○「配慮のスキル」が高い児童生徒が多い。

○「承認感」が高くない児童生徒が複数見られる。

○自分が中心になったり積極的に話したりすることが苦手な児童生徒が多い。

○「かかわりのスキル」が低い児童生徒が多い。

2 児童生徒理解の深化と活用を目指した校内研修の実際と考察

(1) コアチーム

第一年次は、研究初年度ということもあり、事前アンケートからとらえられた協力校の実態に即した研修内容を、主に当チームが提案してきた。しかし、実践を重ねるにつれ、研修後のアンケートに協力校の教員から研修内容に対する要望が書かれるようになってきた。そこで、児童生徒の実態

と教員のニーズを踏まえ、より充実した校内研修にするために、「コアチーム」を立ち上げた（図3）。当チームの指導主

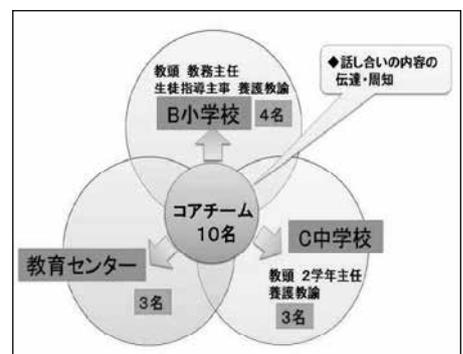


図3 コアチーム

主事3名に加えて、各校から3～4名の教員を「コアメンバー」として選出し、協力校の思いや課題、研修に対する要望等を率直に出し合った。事前調査等から分析した客観的なデータや

当チームの思いもすり合わせながら、校内研修の内容や実施時期などについて話し合った。

また、話し合った内容や連絡事項等は、校内の打合せ等で、コアメンバーの教員から他の教員に伝えた。これにより、協力校の教員全員に、次回の校内研修の内容を周知でき、スムーズな校内研修の運営につなげることができた。

(2) 校内研修テーマの設定

事前アンケートからとらえた協力校の教員の児童生徒を支援する力に関する実態、コアチームの話し合いによる当チームと協力校の教員の思いや願いに加え、Q-Uの結果から把握した協力校の児童生徒の実態に基づき、校内研修のテーマを以下のように設定した。

第5回「日常指導の充実を目指した演習」

「教育相談的な手法を取り入れた提案授業」

第6回「Q-Uを活用した事例研究」

第7回「感情のコントロールが苦手な児童生徒の理解と対応」

第8回「発達課題と児童生徒理解」

なお、本稿では、第5回～第7回の校内研修の実際と考察について述べる。

(3) 第5回校内研修（提案授業）

① テーマ設定の意図と研修の概要

B小学校の教員から「児童同士が互いに認め合えるようになって欲しい」、C中学校の教員から「積極的に話したり、働きかけたりする生徒に育てたい」という思いが出された。また、当チームでは、教員に行ったアンケート結果から、「教育相談的な手法を取り入れた授業により、意図的に人間関係づくりを行ってほしい」という願いがあった。しかし、協力校の中には、教育相談的な手法をどのように授業に取り入れたらよいかよく分からない教員もいた。そこで、これらの思いや願いをすり合わせ、児童生徒の「認め合い」「自己表現」「他者理解」の向上をねらった当チームによる「教育相談的な手法を取り入れた提案授業」を行った。それぞれの授業の展開の中で、エクササイズを進め方や児童生徒への関わり方、児童生徒の活動の様子や思考の変容などを見ることで、協力校の教員の教育相談的な手法を取り入れた授業実施への意欲の喚起を図った。

② 提案授業①（B小学校）

ア 授業のねらい

B小学校第5・6学年合同、21名での授業を実施した。担任は児童の実態を、失敗が怖く、困っていることを上手に伝えられず、遠慮してしまうことがありがちだとらえていた。そこで、授業のねらいを、認め合いやリレ

ーションを確立すること、積極的に自己主張ができるようになることとした。

イ 主な内容；SGE「無人島SOS」

「船が遭難して無人島に漂着した」という状況を想定し、生き延びるために必要な道具を限られた数だけ選ぶ（図4）。その後グループや全体の前で選んだ理由も付けて自分の考えを発表するというエクササイズである。

ウ 授業の様子

「もし、船が遭難したら」と想像をめぐらせながら考えさせたことや、「17の道具の中から七つ選ぶ」として選択の幅をもたせたことにより、自由な発想で考える児童の姿が見られた。

班での話し合いでは、活発な意見交流が見られた。話す相手を認めたり、話した自分の考えを認められたりする経験を通し、リレーションや自己理解、他者理解を深めることができていた様子が見えられた。また、全体の意見交流の場では、「裁縫道具」を選んだ班にその理由が質問され、以下のようなやりとりがあった。



図4 持って行ける道具

班長：無人島に裁縫道具を持って行きます。

質問：どうして～？

班長：理由は、針を曲げて釣り針を作って、そこに糸を結び釣りをするからです。

反応：おー、なるほど！

すごい。意外な使い方！

自分たちの考えた理由が、学級全体に受け入れられたことで、満足感を得られた姿が見られた。

授業後には、「自分の考えをみんなに伝えることは少し苦手でしたが、この授業で自分の考えをみんなに伝えるのが少し楽しくなりました」という感想が聞かれた。

③ 提案授業②（C中学校）

ア 授業のねらい

C中学校第2学年（17名）で授業を実施した。男子3名、女子14名と男女の人数バランスがよくないクラスで、担任は、「男女間の隔たりが心配だ」と感じていた。そ

ここで、授業のねらいを、男女間の交流に主眼を置いたり
 レーシヨンの確立、人間関係づくりの再確認とした。

イ 主な内容

(7) SGE「サインをもらおう」

教室を自由に動き回り、出会った人と自己紹介し合
 い、得られた情報をそれぞれがワークシートに記入する。
 相手にサインをもらいながら歩き回り、多くの人と関わり
 合うエクササイズである。

(4) SGE「アインシュタインの言葉」

担任の先生の学級への思いを表す言葉を、紙一枚に一
 文字ずつ書き、順序をばらばらにして各グループに配る。
 グループのみんなで意見を出し合いながら、ばらばらの
 紙を順序よく並べ替え、意味の通る文にするエクササイ
 ズである。

ウ 授業の様子

(7) SGE「サインをもらおう」

「友達の話すことや考えをよく聴いて、新しい情報を
 集めよう」と留意点を伝えてからエクササイズに入った
 ため、否定されない雰囲気の中、安心して活動する様子
 が見られた。男女間のやりとりでは、少し戸惑いながら
 も、なんとか関わろうと努力する姿が見られた。生徒同
 士がこれまで知らなかった友達の新しい情報を知って驚
 く様子や、相手が大切に思っていることを尊重し合う様
 子がうかがえた。この活動が学級内の人間関係を更に深
 めさせるきっかけづくりになると考えた。

ある男子から、「人との関わりがこんなにも重要だ
 ということが分かりました。もっと人との交流を深めたら
 いいと思ったので、今後に生かしたいと思いました」と
 の感想が聞かれた。

(4) SGE「アインシュタインの言葉」

自由にアイデアや思いついたことを発言し、みんな
 で協力しながら文を考えることができた。文が完成した
 時、拍手がわき起こり、集団としての一体感を味わう様
 子が見られた。また、



図5 アインシュタインの言葉

みんなで見え、生徒たちに強く印象付けられた(図5)。

控えめな女子からは、「しっかりと人の話を聞くこと
 が大切だと分かった。人と関わる上で、話を聞く・しゃ
 べる・やってみよう、を大切に、自分から積極的に

動きたいです」との感想が聞かれた。

④ 考察

提案授業①・②実施後に教員に行ったアンケートで
 は、「教育相談的な手法を生かした人間関係づくりの必
 要性や有効性を感じることができた」の質問項目にすべ
 ての教員が「そう思う」と回答した。自由記述欄には「一
 人一人が楽しく話せる雰囲気づくり、場面設定の大切さ
 を実感しました」「活動に取り組む姿を見て、生徒の新
 たな一面も見ることができました。明日からの指導に生
 かしていきます」との記述があった。生徒の活動の様子
 や授業の雰囲気を見ることで、自分の学級でも活用して
 みようという意識の高まりが感じられた。「児童の特徴
 がよく表れていたの、声をかける時にその特徴を踏ま
 えて話しかけていきたい」との記述からは、児童生徒理
 解を深め、その理解に応じた指導・支援を行う必要性へ
 の気付きも感じられた。

また、生徒たちの自由闊達な活動や達成感を味わっ
 ている様子を見て、リレーシヨンや人間関係づくりの大
 切さを再確認することができた様子だった。

(4) 第6回校内研修(Q-Uを活用した事例研究)

① テーマ設定の意図と研修の概要

事前のコアチーム会議で、協力校の教員から「客観
 的なデータから個や集団の児童生徒を理解する力の向上
 を図りたい」との思いが出された。当チームとしては、児
 童生徒理解の深化を図ることを目指し、前述のとおり、
 担任の主観的理解のみならず、様々な教職員の視点や質
 問紙からとらえられる情報を基にした客観的理解を図る
 こと、かつ、児童生徒の心情に寄り添った共感的理解を
 組み合わせ「多角的・多面的な視点からの児童生徒理

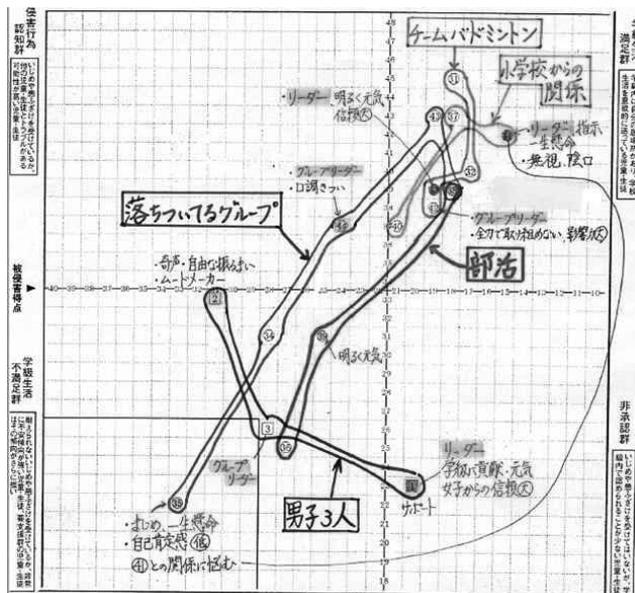


図6 児童生徒理解を深めるための資料

解の深化と指導・支援への活用を図って欲しい」という思いがあった。そこで、Q-Uによる客観的データに、担任の主観的な見方を加えた資料（図6）を使って事例研究を行った。また、より実践的な事例研究になるように、協力校の実際のQ-Uデータを使い、話し合われた支援策をそのまま担任や学年で指導・支援に活用できるようにした。

② 主な内容

ア データの読取り

まず、当チームの指導主事から、Q-Uの基本的な読み取り方に関する説明を受けた後、学級集団の状態を座標上のプロットから読み取った。その際に、担任からの情報も加味して読み取ってもらった。具体的には、「公的なリーダー」「影響力のある生徒」「小グループを形成する生徒及びその特徴」などである。これらを可視化するために、座標上のプロットに個人の情報や小グループのつながりや特徴などを書き入れていった。また、グループごとに色分けすることにより、児童生徒のつながりやグループ内での立場などがより明確化され、児童生徒理解の深化に結び付けることができた。

その後、深められた児童生徒理解を基に、個や集団の課題を見だし、それらの課題に対する指導や支援の方針について個人で考えた。

イ 他の教員との意見交流

小・中学校の教員が混ざるようにグループ編成し、「すぐに行えて、効果が出そうな方法」という視点で協議した。様々な視点から指導方針や支援策が出され、実のある事例研究会になった（図7）。



図7 グループ協議

③ 参加者の感想

小学校の教員から、「小・中学校の先生が話し合うことで、子どもたちの発達段階を長い目で見据えて指導に当たることができます。なかなか他の学校ではない機会なので、とても有意義な研修でした」「自分のクラスでもQ-Uテストのプロット図に色分けの書き込みをして理解を深めたいです。今後の学級経営の参考にしたいです」などの感想が寄せられた。また、担任からは、「今日いただいたアドバイスを早速明日からやってみたいと思います。さらに良い学級を目指して、日々子どもたちと頑張りたいと思います」との感想が聞かれた。Q-Uの新たな活用法により多角的・多面的な児童生徒理解を図ることができた。また、児童生徒理解の深化への重要

性や方法などについて理解することができ、指導・支援に活用していこうという意識の高まりが感じられた。

④ 考察

今回の研修を通して、Q-Uの客観的なデータに担任の主観的な視点を加えることにより児童生徒理解の深化が図られること、また、小・中学校の教員の様々な視点による話し合いによって、より具体的な指導方針や支援策を導き出せることを実感できたと思われる。今回、事例を提供した担任は、事例研究会で話し合われた指導方針や支援策を、実際に日常指導や学級経営に取り入れ実践した。その結果、事後のQ-Uの結果に変容が見られた（図8）。学級生活不満足群や要支援群の生徒の承認得点や被侵害得点が望ましい方向に変容した。これは、教員が生徒理解を深め、それらに基づく指導・支援を行うことが、生徒の承認感や安心感を高めることにつながったととらえられる。Q-Uのデータを新たな視点で活用するという意味でも、協力校の教員の児童生徒を支援する力の向上に資することができたと考えられる。

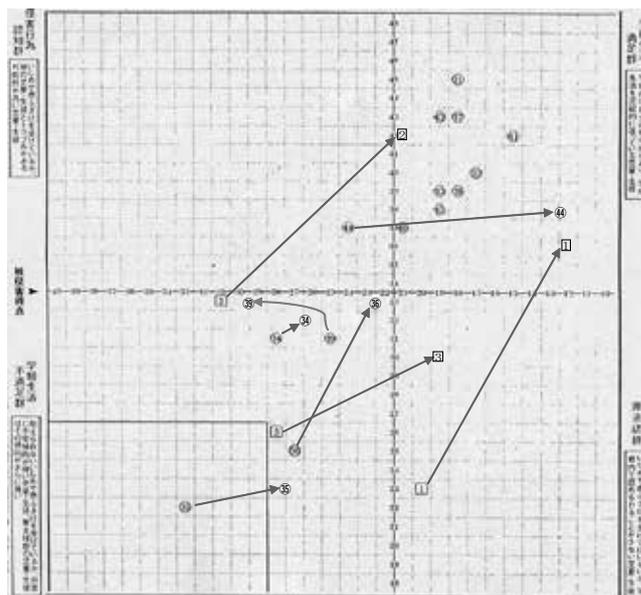


図8 Q-Uの変容

(5) 第7回校内研修（感情のコントロールが苦手な児童生徒の理解と対応）

① テーマ設定の意図と研修の概要

コアチーム会議で「感情のコントロールが苦手な児童生徒について学びたい」との要望があった。当チームとしても、「怒りという感情表現の裏に潜む児童生徒の気持ちについて理解を深めて欲しい」という思いがあった。そこで、怒りと感情のコントロールに関するメカニズムや具体的な対処法について理解を深める研修を行った。また、教員のアンガーマネジメントの講義・演習を通し、自分自身の怒りへの対処法についても学び、その内容を

児童生徒を指導・支援する際に生かすようにした。

② 主な内容

ア 怒りのメカニズムの理解

怒りの感情から「キレる」といった行動に至るまでのメカニズムについて、親子のコミュニケーション場面を例に、脳で行われる情報の伝達や処理と感情コントロールの仕組みの説明を受け理解を深めた。

イ 子どもへの対処

「キレた児童生徒」「キレやすい児童生徒」へは、怒りのメカニズムを踏まえて対処すること



図9 第7回校内研修

の重要性を伝えた(図9)。怒りの感情は、主に自分の気持ちや思いを受け入れられずに負った心の傷が深まることによって引き起こされる。心に傷を負った子どもにとって最も大切なことは、「ありのままの自分」が承認されることである。そこで、学校で承認感を高める具体案などを示し、場面に応じ実際に使えるよう配慮した。

ウ 教師としての心構え

教師として、「キレている児童生徒」に巻き込まれない集団づくりや普段からの心構えについて説明した。「子どもをキレさせる教師の言動」について具体例を挙げ、児童生徒に対するこれまでの言動を振り返る機会とした。

③ 参加者の感想

「これまでの様々な場面を思い起こしながら、この方法が使えたのではないかと考えることができました」「キレやすい児童の担任をしたが、うまく向き合うことができなかつたと感じ、申し訳ない気持ちでいっぱいです。今後は背景にある心情などを理解しながら指導に当たっていきたいと思います」「イラッとした児童に、あの時こうすればよかったなあ、怒りすぎたなあ、いや、むしろ怒らず、かけるべき言葉があったなあ、と反省しました。これからは、イラッとする児童がいてもアンガーマネジメントを活用して、その子のプラスになるようにしたいと思います」との感想からは、今までの自分自身の指導を振り返る機会となったと思われる。

④ 考察

児童生徒がキレる背景やメカニズムについての理解が深まり、教員自身のこれまでの関わり方を振り返るきっかけとなった。また、今後どのような点に気を付け、どのように対処していけばよいのか考えが深まるとも

に、キレた児童生徒に巻き込まれない冷静な対処への備えについて、意識の高揚が見られた。

(6) 校内研修等の成果を確認する事後調査

① 事後調査の対象、内容、方法

実践の効果を確認するため、教員には「児童生徒を支援する力」に関するアンケートを実施し、4件法の平均値において昨年度の事前調査からの変容をとらえた。また、児童生徒の変容は、Q-Uにより把握した。

② 事後調査から見たこと

ア 「児童生徒を支援する力」について

「児童生徒を支援する力」の変容をアンケート結果から見ると、A1～B2すべての項目において、上昇した(図10)。

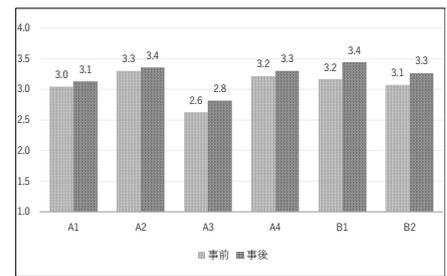


図10 児童生徒を支援する力

設問ごとに詳しく見ていくと、〈教員が個人として身に付けたい力(A1～A4)〉については、小・中学校共に、設問1「発達の特徴や課題を踏まえた児童生徒とのかかわり」が、小学校で2.6から3.4へ、中学校で2.9から3.3へ、設問15「問題を抱えた児童生徒のよさやできていることにも注目した支援策の策定」が、小学校で2.8から3.1へ、中学校で3.0から3.3へと変化した。これらは、本研究を通して、協力校の教員の児童生徒理解に対する意識や、問題を抱えた児童生徒理解に対する支援の在り方について、理解が高まったためと考えられる。

〈組織として高めたい力(B1・B2)〉については、小・中学校ともに多くの設問において数値が上昇した。特に、設問23「集団づくりや人間関係づくりなどの指導に対する、情報の共有や具体的な取組」では、小学校で2.9から3.1へ、中学校で2.7から3.0へ、設問24「問題を抱えた児童生徒への組織的な対応」が、小学校で3.0から3.4へ、中学校で2.6から3.0へと変化した。これは、校内研修の中に、自分の考えを話す、相手の考えを聴くなどの活動を多く設定したことにより、話しやすい雰囲気醸成され、親交も深まり、同僚性が上昇したことと、意見の交流を通して、小・中学校両校の指導の方針や方向性が確認され、組織として取り組むことの大切さが共有されたことに起因していると考えられる。

さらに、小学校でのA2「コミュニケーション力」が、3.1から3.3へと変化したことから、日常指導の充実を図るために活用した「日常指導ふりかえりシート」及び「基礎調査結果」により、児童生徒への関わり方の重要性に

についての認識が高まったととらえられる。また、中学校において、A3「児童生徒間の人間関係づくりを促進する力」が、2.7から3.0へ変化している点から、人間関係づくりを促進させる教育相談的な手法の提案授業を見て、その重要性や有効性の認識が高まったと考えられる。

イ Q-Uについて

小学校では、学級の雰囲気(学校生活意欲)に関する平均値が上昇しており、中でも「あなたのクラスはみんな仲良く協力していますか(下学年)」「あなたのクラスは、みんな協力し合っていると思う(上学年)」の質問について、上学年・下学年ともに平均値が上昇した(図11)。

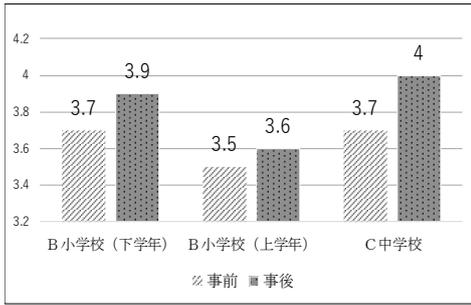


図11 学級の雰囲気(学校生活意欲)

これは、校内研修による児童生徒理解の深化が図られたと同時に、日常指導の充実が図られ、学級づくりに生かすことができているためではないかと考えられる。また、「被侵害得点」の平均値がほぼすべての学級で低下した(図12)ことから、各担任が日常指導の見直しを行い、具体的な取組の目標を明確にしたことにより、日常指導の充実が図られたことが推察される。

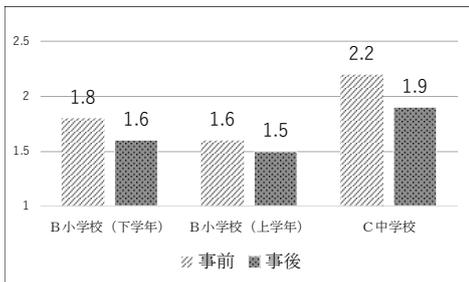


図12 被侵害得点

中学校では、「学校生活意欲」の中の「友人との関係」について平均値の上昇が見られた。特に、「友人とのつきあいは自分の成長にとって大切だと思う」の上昇が大きい。また、「クラスの人から好かれ、仲間だと思われる」は、学校の平均が4.8と高い数値であり、よりよい人間関係が構築されている様子が見える。これは、教員が児童生徒を多角的・多面的に理解し、その理解に基づき、きめ細かい指導や支援を行ったり、人間関係づくりに関する研修で学んだ内容を学級づくりに生かしたりしたためであると思われる。さらに、「承認得点」のすべての質問で平均値が上昇したことから、日常指導の充実が図られたことで、学級内で児童生徒同士が認め合う雰囲気が醸成されたことが推察される。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 昨年度に作成した「日常指導ふりかえりシート」を活用した校内研修を今年度も行い、教員自身の日常指導充実への意識を高め、日常的な児童生徒への支援につなげることができた。
- (2) 昨年度の小・中学校合同の研修会を通して高められた両校の教職員の関係性のよさを生かしながら、校内研修を通して更に小・中学校の交流を深めることができた。その結果、児童生徒理解の深化と活用への課題意識とともに、小・中学校9年間を見通した支援を継続的に行う意義が共有された。
- (3) コアチームを立ち上げ、協力校の教員や当チームの思いを共有することで、協力校の実態とニーズに応じた効果的な校内研修を行うことができた。その結果、児童生徒理解の深化の重要性と具体的な指導・支援への活用が図られ、児童生徒を支援する力の向上に資することができた。
- (4) Q-Uを使った事例研究を行ったことにより、Q-U活用の可能性を広げることができた。客観的理解のためのデータとしてはもちろん、それを小・中学校の教員が様々な視点から読み解くことで、より多角的・多面的な児童生徒理解が促進され、具体的な指導方針や支援策の考案につなげることができた。

2 研究の課題

- (1) 教員の児童生徒を支援する力の向上を図るには、日常指導の充実への意識の高揚と、教員のニーズに応じた効果的な校内研修の充実を図っていく必要がある。その際、今回効果が確認された「日常指導ふりかえりシート」や「コアチーム」の活用の在り方について広く発信していきたい。
- (2) 校内研修により、教職員の意見交流や共通理解が図られたことが「児童生徒を支援する力」の向上につながった。継続的な校内研修実施のために、校内研修実践資料集による情報提供や出前講座等を通して支援できる体制を整える必要がある。

<参考・引用文献>

- 1) 生徒指導提要 (文部科学省 2010年)
- 2) 小学校学習指導要領解説 特別活動編 (文部科学省 2008年)
- 3) 提言 我が国の子どもの成長環境の改善にむけて (日本学術会議 2016年)
- 4) 入門 学校教育相談 嶋崎政男著(学事出版 2014年)
- 5) THE 子ども理解 「THE教員力」編集委員会著 (明治図書 2015年)